

三輪さんとのコラボレーション

私と三輪さんの交流はIAMASが開学した1996年に始まりました。大学院の所属コース（音楽や映像等を扱う領域・studio2＝通称スタニ）や履修科目「プロジェクト」の共同担当から本学での関わりは長く、2023年度も「タイムベースドメディア・プロジェクト」のミーティングで毎週顔を合わせていました。共同での作品制作も少なくなかったのですが、長いだけでなく濃密な時間を過ごしたと言えます。

最初の共作は1997年の観客参加型舞台《ON50》です。IAMAS教員6名の各専門分野を活かして制作したもので、三輪さんと前田も参画し、共同制作の可能性を発見する契機になった作品でした。当時から、三輪作品の発表には積極的に足を運んでおり、三輪さんがボコーダーを使用したボーカル（ボコカル）を担当した「サイケデリックぶんぼう」を観たのもこの頃でした。その他には、1998年の《言葉の影、またはアレルヤーAのテキストによる》が素晴らしい公演だったので、すぐに感想を伝えたことを覚えています。本作の制作プロセスを学内で見ることができたのは幸運で、三輪さんが全力で、作品の重要な要素としてプログラムノートに取り組む姿を目撃していました。

その後、三輪さんから「モノログ・オペラ《新しい時代》」の映像演出を依頼されます。本作は2000年に発表後、2017年には三輪さんの申し出から「三輪真弘＋前田真二郎」名義で再演され、佐治敬三賞を受賞しました。また、近年では、コロナ禍に無観客ライブ配信作品《三輪真弘祭 一清められた夜一》の映像監督も務めました。この2作が三輪さんとの仕事では突出して大きく、そして手応えのある作品です。両作の制作中、三輪真弘の「核心を見極める集中力」を間近で体感できたことは財産です。

最後に印象深いエピソードを。私の映像作品《日々“hibi” 13 full moons》を三輪さんに観てもらった数日後に、三輪さんが研究室で「勝手に映画音楽を作りました」と、逆シミュレーション音楽によるシミュレーション音源を聴かせてくれました。これはその後に《ライブ上映「日々のための音楽」》に繋がっていきます。このような自然発生的なコラボレーションは、日常に埋もれてしまう出来事かもしれませんが、きっと忘れません。

IAMAS所属の三輪真弘の活動は終了しますが、新たな環境での更なる展開を心より楽しみにしています。これまでのご縁に深く感謝します。

前田 真二郎 まえだ しんじろう（情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] 教授）